勝利は俺のためにある！INネギま

謎の神官

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勝利は俺のためにある！ＩＮネギま

【Ｎコード】
Ｎ０９６６Ｏ

【作者名】
謎の神官

【あらすじ】
ある日神のミスで死んでしまった。神崎秀は、ネギまの世界へ転生する
そこでハーレム作ったり、大暴れしたりとやりたい放題
一体どうなる！？

第一話［死んだ俺は］（前書き）

始まったぜ！これから主人公無双になっていくので見ていてくれ！！

第一話［死んだ俺は］

俺、神崎秀は、死にました。いやぁ～人が死ぬのは、呆気ないことだね。

車に轢かれそうな子供を助けようとして、代わり轢かれてしまった。

そして今俺の目の前に・・・・。

「すまぁぁん！」

と土下座をしている。変人が1人つうか誰だよ。お前

「ワシは神じゃこの度は、すまんワシの手違いで主を死なしてしまった」

「手違い？」

「あの車に轢かれても主は、死ぬはずではなかった」

「どういう意味だ」

「奇跡的に助かるはずじゃったが、ワシが間違えて、主の命の火を消してしまったのじゃ」

ほう・・・よし殺そうとりあえずこの、糞爺殺そう

「まっ待て！別の世界にはなるが生き返させるから待つのじゃ！」

「それならいいだろう」

「能力は三つまで容姿と世界を決めれるがどうする？」

「そうだな」

［世界］

・ネギま

［容姿］

・ＦＦ？のスコール

［能力］

・アニメ&漫画の術技が使える（発動時の代償はなし）

・魔力が木乃香の１０倍、氣がラカンの１０倍

・サイヤ人の体（大猿にはならないが月を見ると戦闘力が１０倍になるあと尻尾がない）

「こんな感じで」

「チートじゃな」

「そのくらいしないと楽しくないじゃん」

「そういうものかのう？まぁよいか」

パチン

と爺さんが指を鳴らす。そして俺の体が光だし治まると・・・。

「おお！スコールだ」

「どうじゃ！すごいじゃろ」

「ああすげぇ！」

「そろそろ行くか？」

「ああ行って来るありがとな」

「なぁにこっちも悪かったの」

「もう気にしてない・・・じゃあ」

「じゃあの」

そして、俺の意識は、暗闇に落ちた。

第一話［死んだ俺は］（後書き）

チートかな？

第二話［転生した先は］（前書き）

主人公は何処に転生するんでしょうか？

第二話［転生した先は］

俺は、転生した・・・・・。いやぁ～最初はびびったよ。うん

だって、目を覚ますといきなり変な爺さんのドアップだったから

それに体も縮んでたし、どうやら俺は、捨て子（という設定）らしい

俺を拾った。爺さんの名前は、ジョルジュ・ベルスターと言う名前

でけっこう有名な

魔法使いらしい、まぁそこらへん関係無しにいい爺さんだよ。

ちなみに俺の今の名前は、シュウ・ベルスター前世？と同じ名前だ

からちょっと驚いた。

しかしもっと驚いたことがあるそれは、俺の幼馴染だ

？「おーい！シュウ早く来いよ！」

シュウ「分かってるよ！つうか何処行くんだよナギ！」

そう名前を聞いたとおりあのナギ・スプリングフィールドの幼馴染

になって

しまったのだ。

ナギ「あのムカつく先公に、いたずらするんだよ」

シュウ「またかそろそろ、あの馬鹿も引っかからないだろ」

ナギ「大丈夫だって、いざという時は、逃げればいいんだしよ」

シュウ「はぁ、まったく」

まぁ毎回俺がこんな風にナギに、振り回されているわけなんだよな・・・うん

もう慣れたけどね。

校長「まったくお前達は、またナギ、シュウお前達は、立派な魔法使いになれる
素質があるというのに毎回毎回、いたずらばかりしおって」

結論から言うといたずらは見事に失敗俺とナギは、校長の説教を受けている。

もちろん馬の耳に念仏と言った感じだが

ナギ「へっ！だいたいあの先公が悪いんじゃねぇか何が『呪文もまともに覚えられないチリ』だ！！」

シュウ「まぁ落ち着けよナギ」

ナギ「シュウお前だって『魔力平均以下の器用貧乏』なんて言われたじゃねぇか！」

確かにそう言われたけど、リミッターしてるから仕方ないんだよね。

さすがに、こんな子供があれだけの魔力あったら、解剖とかされそうだから

シュウ「俺は、気にしてないんだが」

ナギ「悔しくないのかよ！」

校長「確かに、あの教師にも悪い点があった。だがお前等も悪い
一体何度いたずらを止めろと言った次からはもう許容できん次した
ら退学と思え！」

退学か～さすがのナギも、こうすれば引き下がるかな

ナギ「上等だ！こんな学校こっちから止めてやる！行こうぜシュウ」

シュウ「そうそうって！？ナギ待てよ！」

何で？ここかは謝るパターンだぞ！俺こんなこと知れたら爺さんに
殺されるんだけど！？

ナギ「分かってる。俺が何も言わなくてもお前はきてくれるんだろ
お前はいつもそうだったもんな不良扱いされている俺に普通の友達
のように接してくれたのは
お前だけだったからなこれからも頼むぜ相棒！」

それ全部お前が俺を巻き込んだだけだろうが！って・・・・俺も悪乗りしてたよな

ああもう・・・仕方ねぇ！

シュウ「止めてやろうじゃねぇか！」

ナギ「さすが！相棒じゃあなじいさん」

校長「まっ待たんか！？ナギ！シュウ！」

校長が何か言ったいたが、無視だなさてここから、なのか？

そろそろ、リミッター外そうかな

シュウ「なぁナギこれからどうするんだ？」

ナギ「そうだな家に帰っても、どうせ怒られたあと校長に謝りに行かされるし」

シュウ「じゃあどうするんだ？」

考えてる。とこ悪いが俺は、そわそわして、たまらん爺さんがまだ来ませんように実力的には勝てるが爺さんとは戦えないし

ナギ「・・・・・旅に出るかな」

シュウ「旅？よし！それでいこう」

ナギ「おう！じゃあ出発だ！俺とお前のコンビなら無敵だぜ！よろしくな相棒！」

シュウ「ああ相棒！」

無敵はちょっと言いすぎだと思うが、まぁいずれはってことで

今は一刻も早くここから離れなくては爺さんに捕まる前に！！

第二話［転生した先は］（後書き）

旅開始！ここから飛びます。

第三話［オスティアの姫御子］（前書き）

数年単位でたびました。

第三話［オスティアの姫御子］

ナギと旅に出てから、数年の月日が流れた。紅き翼を作って最初は苦労する。

こともあったが、今では仲間も増えた。

1人は青山詠春
剣士で神鳴流という剣術を使う、生真面目な苦労人

もう1人はアルビオレ・イマ
アルという愛称で重力魔法を得意としている。ロリコンの変態

そして最後にフィリウス・ゼクト
見た目は爺口調の子供だが実際は何百年も生きている。爺さん
故に魔法の腕がいい

今のところ、この3人だなちなみに俺とナギは、ゼクトに魔法を教えてもらっている。

無くても大丈夫だが、まだリミッターしてるし、ホントそろそろ外すか

ああちなみに始動キーはヴェル・ヴォルト・ヴェイヴォルトだ

そして不本意だが戦争に巻き込まれている。

しかし・・・・・・。

シュウ「何で！？俺が紅き翼の副リーダーになってるの！」

おかしい何故だ！俺は何もしてない！強いて言うならナギのあんちょこ読むとき

の援護をしているくらいだぞ・・・・なのに

シュウ「何だよ！？『赤毛の悪魔の腹心』って！」

ナギ「いいじゃねぇか、かっこいいぞ」

アル「そうですよ、かっこいいですよ」

ゼクト「そうかのう？」

詠春「シュウも苦労してるな」ウンウン

おい！詠春なに頷いてんだ。少なくともお前に同情されたかないぞ！

ああ！もうそれからもあの２つ名がなくなることはなかった。

そして数ヵ月後戦争は本格的になった。

争いは全世界に広がりどの国も必ずヘラス帝国またはメセンブリーナ連合に

入っている。しかし帝国側の攻撃は凄まじく、あっという間に王都オスティアの門前
まで迫っていた。

ナギ「くそっ！このままじゃ間に合わねぇ！」

確かにこのままでは、帝国は、鬼神兵や魔道兵器で確実にオスティアは陥落する。

仕方ない、いよいよリミッターを外すか

シュウ「リミッター解除」

俺以外の紅き翼「ッ！！？」

シュウ「シュウお前その魔力！」

ゼクト「なるほどの力を隠しておったか」

アル「あなたもバグキャラだったとは」

詠春「驚いたな・・・」

シュウ「そんなこと言う暇あるなら俺に掴まれ！」

皆は驚いて、いたがとりあえず皆俺に捕まった。ことを確認し
額に指をあて集中する。
シュン！

シュウ「着いたぞ」
ナギ「もう！？何やったんだシュウ？」
シュウ「瞬間移動だ」
アル「バグですね」
ゼクト「バグじゃのう」
詠春「あ、頭が・・」

さて、今まで暴れなかった分暴れてやりますか
実験も兼ねて・・・・な

シュウ「そんなことよりも、早く助けねぇとこのままじゃおちるぞ」
ナギ「そうだったな！早くしねぇと」

チュゥゥゥゥゥン！

ドカーン！

そんなことを言っている。間にも帝国の鬼神兵や魔道兵器、戦艦が

オスティアを攻撃されている。がその攻撃は、塔に当たる直前に

かき消されている。あれが黄昏の姫御子のマジックキャンセル能力

かしかし

いつまでももたないだろう、くそ！胸糞悪りぃ

自分の子供を戦争の道具に使うなんてな、ホント腐ってるぜ

シュウ「ナギ！合図を頼む」

ナギ「おう！紅き翼出撃！！」

全員で作戦を決めながら走る。まぁ基本作戦なんてないが

しかし今度は違うちゃんとした作戦が必要だそして作戦は決まった。

俺とナギ、詠春にアルで城に向かいゼクトは、敵の足止めだ

詠春「おい！鬼神兵が！」

ちっ！もっと早くリミッター外しておけば良かった。
まぁ過ぎたことは仕方ねぇか・・・・でも

シュウ「やらせねぇぞ！紅蓮の炎に眠る暗黒の竜よその咆哮もて我敵を焼き尽くせ
『魔竜烈火砲！』」

ドゴォォォン！

シュウ「これ以上好き勝手させねぇぜ！」

ナギ「すげぇな！シュウあんな魔法見たことないぜ！」

アル「威力も凄まじいですね。欠片もありませんよ」

詠春「あ・・・ああ」

そんなに威力あったかな確かに上級魔法だけどあれより威力ある
魔法はけっこうあるけどな

シュウ「ナギ！次は塔の周りの敵を蹴散らすぞ」

ナギ「おう！」

シュウ＆ナギ「くらえ！『千の雷』！！」

俺とナギが放った。『千の雷』は塔の周りを走り、敵を薙ぎ払っていく

「おお・・・・」

何か黄昏の姫御子のまわりにいる奴等が歓声を上げている。

ちっ！生きてたのか

あそこにいるのが黄昏の姫御子か・・・見たところまだ大丈夫だが口から血がでているな俺は姫御子に近づいた。

シュウ「こんちわ俺は、シュウお前の名前は？」

「？・・・ナ、マエ・・・」

シュウ「そう名前何て言うんだ？」

アスナ「アスナ・・・・アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・

エンテオフゥシア」

シュウ「アスナか・・いい名前だな」

アスナ「イイ・・・ナ、マエ？・・・」

シュウ「ああ根拠はないが、俺が保障する」

やはり無反応か・・・悲しいなでも必ず、助けてやるからな

アスナだから・・・・あと少し待っていてくれ俺は、アスナの頭を

撫でながら、そう心に誓った。そして立ち去る際耳元で一言

シュウ「いつか皆で世界をまわろう、世界はちっぽけじゃないって

ところを

見せてやるからな覚悟しとけよ」

さて、残りの敵を片付けるか、一気にやるか、鬱憤を晴らすために

シュウ「ナギこの一撃で決める少し離れていてくれ」

ナギ「何をするんだ？」

シュウ「ふ～、黄昏より暗き存在、血の流れより紅き存在、

時の流れに埋もれし偉大なる汝の名において我今闇に誓わん、

我等が前に立ち塞がりし全ての愚かなるものに、
我と汝が力もて、等しく滅びを与えんことを！『竜破斬！』」
戦場を紅い光線がつき抜け・・・・鬼神兵に炸裂する。・・・・そして
ドッゴォォォオオオオオオン！！！！！

激しい轟音と共に爆発がおき、全ての敵を葬った。

俺以外「・・・・・・（ポカーン」

そして俺の一撃で相当痛手をした。帝国は、敗戦オスティアは、無事守られた。

そして俺は・・・・・。

ゼクト「待たぬか～！！」

シュウ「師匠許して～！」

ゼクト「許さん！死ぬところじゃったぞ！魔法の射手火の１０００矢！」

シュウ「うぎゃあぁぁぁぁ！！」

師匠に追いかけ回され、魔法の射手を撃ち込んできた。・・・・死にそう

第三話［オスティアの姫御子］（後書き）

主人公最強イヤァァァハァァァ！！！

第四話［発生していたイレギュラー］（前書き）

今回驚きの事実が発覚！？

実は〇〇は×××だった！！！！？

第四話［発生していたイレギュラー］

どうも！シュウです！！あの時の活躍で俺のファンクラブが出来ました。

元からあったみたいだけど拡大したらしい、なんか嬉しいよな

いやぁ～しかしあれは、死ぬかと思った。

だって、師匠が魔法の手射だけじゃなくて、燃える天空とかも撃ってきて、

大変だったよ。今度何かを奢るということで、難を逃れた。

しかし！今再び難が！！！？

シュウ「な、なぁナギ何でそんなに機嫌が悪いんだよ」

ナギ「別に何でもねぇよ！」プイ！

一体なんでこんなに怒ってるんだ？ていうかこのプイ！を可愛いと思った

俺は、何だろうか。

シュウ「だ、誰か助けろ（小声」

アル「無理ですよ理由も分からないんでしょ（小声」

ゼクト「本当に心当たりはないのかのう（小声」

心当たり・・・か？確か機嫌が悪くなる。前に、一緒に街に出かけたよな

その時に何かあったかな？そこら辺ぶらぶらして、割り勘で飯食って、その後

・・・・・。

シュウ「ファンに囲まれた」

アル「ファンに？それとナギの機嫌と関係あるんですか？」

ゼクト「ファンに何かされたのではないのかのう」

そんな感じでは、なかったけどな、どちらかといえば、俺のほうが被害があったし、そういえば、ファンと別れてからだったな機嫌が悪くなったのって

アル「おや？ナギ何処へ行くんですか？」

ナギ「風呂だよ！」

と言い残し、隠しようのない怒気を纏い、行ってしまった。

詠春「あれは、相当きてるぞ」

シュウ「俺が何をしたというんだ」

アル「やはり、そのファンではないでしょうか」

ゼクト「そうじゃのうシュウ、詳しく話してくれんかのう」

シュウ「ああ、分かった」

あれは、帝国を撃退して、3日ほど経った。今日の朝のことだ

ナギが珍しく、朝早いと思ったら、何か顔を少し赤くさせ話しかけてきた。

ナギ「なぁ、シュウ？／／」

シュウ「どうしたんだ？ナギ」

ナギ「今日さ、ちょっと一緒に街に行かねぇか？／／」

シュウ「街か？別にいいぞ」

ナギ「ほっホントか！約束だかんな！」

シュウ「あ・・ああ／／／／」

何かすごく嬉しそうな、笑顔をこちらに、向けてくる。ドクン！／／／

っ！？何だこれ・・・心臓が少しうるさい・・・これって・・・・

まさかな／／／

ナギ「シュウ！早く行こうぜ！」

シュウ「ちょっ！？分かったから引っ張るな！」

たく、俺より頭二つ分くらい背が低いのに、何でこんなに力があるんだ？

ナギ「腹減ってきたな」

シュウ「そうだな、あっあそこに入ろうぜ」

ナギ「おう！飯だ飯～」

腹が減って、飯を食べるために、店に入った。とりあえず俺は、パスタを

頼n「そこは、どうでもよいから飛ばせ！ドカ！」痛！杖で殴らないでほしい

ええ～と、飯を食い終わって、またぶらぶらしてたらいきなり声をかけられた。

「ちょっ！？あれってシュウ様じゃない！」

「あっ！？それにナギ様もきゃあああ！」

シュウ「な、何だ！？一体？」

ナギ「うわわわ！？こっちに来るな！」

「「「「「「きゃあああああ！かっこいいシュウ様ぁぁぁ！ナギ様可愛いいいい！」」」」」」

くっ！？これがファンの力か、なんという凄まじさ、あっ！？誰か俺の尻を触った！

つうか体全体を触られてる。とナギを見てみると

ナギ「・・・・・」

あれ？ナギの様子が、おかしいぞ？ひょっとして可愛い！と言われたのが

嫌だったのか？村にいた時も俺が可愛いとか、言ったら顔を真っ赤にして怒ってたし

まぁ、それから数十分後にようやく開放された。サインを強請られて、書いたが

あれは、何か気持ちいいな・・・・とここまでだな

ゼクト「・・・まさかの」

アル「ええ・・・・まさか」

詠春「・・・・・ぶふぉ！」

師匠！アル！何がまさかなんだ！？それと詠春は何で鼻血を出した！？

アル「とりあえず、シュウ謝ってきてはどうですか？」

ゼクト「それがよいぞ」

シュウ「ああ・・・分かった」

だが、やはり思い当たることはない、ナギはけっこう理不尽だが、理由もなく、あんなに怒ることはない、でも何か変だったよな

ナギ何か・・・その女の子ぽかったし、というか背も低い（１６０位かな）

顔だって、童顔ってゆうか、素で可愛いし、

いやいや、・・・まさかな・・・ホントまさかな

と考えている。間に風呂場に着いた。

シュウ「ナギ、いるか」ガチャ

ナギ「なっ！？／／／／／」

シュウ「はっ！？／／／／／／」

えっ！？ナギが裸で何か・・・女性特有の体の曲線と胸に小さいけど2つの山が・・って

ナギ！？何あんちょこ持ってるの！！ちょっ！！！？

シュウ「まっ！待てナギ話せば分かる！」

ナギ「うるせえぇぇぇ！『雷の暴風！』／／／／」

ドッカァァァン！！

シュウ「ぎゃあああ！」

俺はそのまま、『雷の暴風』をもろにくらって、気絶した。

真っ赤な顔で胸を隠している。ナギを見ながら・・・。

第四話［発生していたイレギュラー］（後書き）

どうでしょうか！

バトルはゼロでしたが、後から重要になる設定なので

第五話［仮契約］（前書き）

ナギは、実は女の子だった。

この後の発展はどうなるかな？

それでは始まり、始まり

第五話［仮契約］

シュウ「・・・知らない天井だ」

アル「おや？目が覚めましたか」

シュウ「アルか、俺どれくらい気絶してた？」

アル「ざっと、一時間くらいですよ」

一時間か・・・まぁ

ナギの『雷の暴風』をまともにくらったからな・・・それに

ああ！？どうしようまさかナギが、女だったなんて、

俺というイレギュラーのせいか・・・。そんなこと考える前に

ナギに謝らないとな

シュウ「アル、ナギは？」

アル「自室にでも、いるんじゃないんですか」

シュウ「わかった、ありがとう」

俺は、アルにお礼を言い、部屋から出た。
そして、ナギの部屋に向かった。

シュウ「ナギ、いるか？」コンコン

ナギ「何だよ」

ナギの部屋に着き、ノックで呼ぶと扉を少し開け、顔が見えた。
その顔は、前より不機嫌そうだった。とりあえず俺は、用件を言う

シュウ「その、謝りたくてな」

ナギ「・・・・・」

シュウ「ごめん！覗いちゃったりしてさ何でも言うことときくから、許してくれ！」

ナギ「・・・・・」

黙ったままか、はぁ・・・どうしようこのままじゃ、仲直り
どころか一生口きいてもらえないかも

ナギ「・・・何でもか？」

シュウ「あ、ああ！何でもだ」

ナギ「じゃあ・・・入れ」

これは、一応許してもらえるのか？ふ～良かったぜ

と心の中で安心しつつ俺は、ナギの部屋に入った。

何でだろう？前は入っても何ともなかったのに、何か緊張する。

ナギ「なぁ、シュウ」

シュウ「な、何だ？」

ナギ「お前、俺のこと男と思ってたんだろ」

シュウ「えっと、・・ごめん」

ナギ「別に・・・気にしてねぇよどうせ、俺は、男みたいな口調だし

胸も小さいし、男みたいって言われても仕方ないよな」

気にしてない、とナギは言うがその顔は、今にも、泣きそうな顔だ

った

俺は、その顔を見ていると何故か胸の辺りがチクチクした

こんな顔は見たくなかった、させたくなかった。

後悔すれば、限がなり・・・でも俺は

笑って欲しい、ナギの悲しそうな顔は見たくない！

そして、ナギの頬に伝って流れている。雫を見たとき

俺はいつの間にかナギを抱きしめていた。

ナギ「ッ！？」

初めは、吃驚して少し暴れたが今は、落ち着いている

それを見て、俺は、口を開く

シュウ「ごめん・・・気づけなくて、悲しい思いさせて、ごめん」

ナギ「ぅ、うわあぁぁぁぁん！」

この涙も、この震えている体も俺のせいなんだよな

せめて、これでナギの気持ちが軽くなりますようにそんな願いをしながら

俺は、さらに強くナギを抱きしめた。

ナギ「シュウ、ありがとう」

シュウ「いいんだよ、元は俺のせいだしな」

ナギ「なぁ・・・・シュウ／／／」

ナギが顔を赤くさせ、俺を見上げてくる。即ち上目遣い

俺の顔もそれに反応するように、赤くなる。

シュウ「な、何だ？／／／」

ナギ「何でも言うことときくって言ったよな？／／／」

シュウ「あ、ああ言った／／／」

ナギ「なら、・・俺と仮契約しろ！／／／／」

先よりも、顔を赤くさせ、言うナギその言葉に

俺は、一瞬戸惑ったがその後すぐに、答えた。

シュウ「分かった／／／」

ナギ「じゃ、じゃあ従者は、シュウだぞ／／／／」

シュウ「ああ、それでどっちでやるんだ？／／／／」

仮契約の仕方は2種類ある。一つは、血で行うもの

もう一つは、その、キスだ／／／比較的後者の方が、手間がかからない

ナギは、一体どっちを！？

ナギ「シュウ／／／」

ナギは、俺の名を呼びながら、顔を赤くさせ顔を近づけてくる。

こ、これは！？

シュウ「ナギ、ん「ちゅ」／／／／」

口付けが終わり、唇が離れた。ナギの顔を見ると

いつものような、子供っぽい感じのナギの雰囲気では、なく妖艶な1人の女として、とても愛おしく見えた。

ナギ「こ、これで本当のパートナーだな／／／／」

シュウ「ああ、そうだな／／／／」

ナギ「シュウ、・・・まだ足りないもっと、俺を、んっ「ちゅ、ちゅる」！？／／／／」

ナギの言葉で俺はもう、何も考えられない、ナギをこの愛おしい人をもっと愛したい

キスだけじゃあ足りない俺は、・・・ナギが・・・欲しい！

そして、俺はナギに深い口付けをしていた。

シュウ「はぁ、・・はぁ、俺も足りない／／／／」

ナギ「はぁ、・・・はぁ、シュウ・・もっと／／／／」

シュウ「もう、止まらないからな」

ナギ「ああ、こい、／／／／」

そして、俺とナギは一夜を共にした。

あんなに、誰かが愛おしいなんて、思ったのは初めてだった。

俺は、誓った。もう二度と悲しい思いなんてさせない

シュウ「絶対に、幸せにしてやる／／／」

ナギ「絶対だぞ、シュウ／／／」

シュウ「ああ、絶対だ／／／」

俺は、誓いを立てるように、深い口付けを交わした。

第五話［仮契約］（後書き）

甘〜い！よね。

こういうのは未経験だったので、どうでしょうか？

感想を書いてくれたら、嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0966o/

勝利は俺のためにある！INネギま

2010年10月9日22時51分発行